

# 2025年度三重大学「学生海外チャレンジ応援事業」報告書

計画タイトル※申請書と同じタイトルを記載すること	採択コース
ケニアの医療現場に触れて:学生としてできる国際医療支援	Aコース

学生情報	
氏名	菱田 椎菜
所属学部・研究科	医学部医学科
学年(出発時)	5年

渡航先情報	
渡航先	ケニア ナニユキ
渡航先滞在期間	2025年7月30日～8月9日
訪問先機関等	Nanyuki Teaching And Referral Hospital
訪問先機関での身分	Volunteer

渡航概要と内容
<p>ケニアの首都ナイロビから3時間ほど離れたナニユキという町を訪れ、2週間の医療インターンを行いました。活動内容は大きく2つあり、アウトリーチ活動と地域病院での実習です。アウトリーチ活動とは、物理的・経済的に医療にアクセスできない地域に出向いて、無料の診察や処置、乳児検診などを行う医療支援活動です。ここでは医師や看護師とともに、地域住民のバイタルサイン測定や乳児・幼児の発達観察、ヘルスチェックなどを行いました。また、簡単な感染症の予防講習や生活指導なども行い、地域住民とのコミュニケーションをとることもできました。もう一つの活動として、ナニユキで主要な地域病院を訪れ、見学・実習を行いました。病院内を案内して頂き、私は実習科として外科と救急科を選び、実際に外科手術や救急現場の処置などに参加させて頂きました。その病院での実習を通して、手技の習得だけでなく現地の医療従事者や他国からの医学生などと交流をし、アフリカの医療の現状や先進国との医療格差についても学ぶことができました。また、病院外の活動としては、チャイルドケアプログラムに参加し、地域の小学校で子どもたちとの交流も楽しみました。これらの活動後の夕方には、ケニアの公用語の一つであるスワヒリ語レッスンに参加したり、マサイ族の伝統舞踊を習得したりするなど、他のインターン生との交流も盛んに行うことができました。</p>

渡航により達成できたこと
<p>今回の渡航では、発展途上国の医療現場を実際に自分の目で見る事ができたこと、そして英語で臨床の現場を経験できたことが大きかったです。本来見学させて頂ける科は1つの診療科のみでしたが、自らお願いして、救急科と外科の2科を見学させて頂きました。救急では狭心症や外傷、1型糖尿病など、日本でもよく見るようなケースが多かったのですが、外科では虫垂炎と帝王切開がほとんどを占めており、症例の偏りや医療リソースの限界を感じました。印象的だったのは、子供の出生数がかかり多いことと、ナニユキで最も大きな病院でさえ高度な手術を行えず、がん患者などはナイロビの他施設まで搬送する必要があることです。さらにその搬送すらすぐにはできない場合もあると聞き、医療の地域格差や医療インフラの整備の重要性を実感しました。また、アウトリーチ活動では医療アクセスの悪い地域に足を運び、現地の方々とのコミュニケーションを取りながら医療支援を行うことができ、医学的なことだけでなく、文化や価値観の違いも感じる事ができました。</p>

### 渡航を通じて感じたこと・学んだこと

今回の渡航を通じて最も印象に残ったのは、発展途上国と先進国における医療の格差です。発展途上国では先進国のように最新の医療機器が整っているわけではなく、必要最低限の医療資源しかない中で、検査機器や画像診断に頼るのではなく、問診や身体診察など患者さんから直接得られる情報を大切にしていたことが印象的でした。私が訪れた病院にはCTやMRIなどはなく、かろうじてX線はあるものの、それも滅多に使わないとのことでした。そんな中でも、工夫を重ねて診療にあたっており、どんな環境でも対応できる力の重要性を感じました。救急体制についても、日本のように24時間体制で対応できるわけではなく、救急車の台数も限られており対応に時間がかかって処置が遅れるケースが多いようです。そういった医療アクセスの問題が患者さんの予後に関わってくるということを痛感しました。また、アウトリーチ活動を行う中で、高血圧の患者さんがかなり多いことに驚きました。現地の人と話す中で、スマホの普及による運動不足や、ケニアの塩分の多い食事などが背景にあるようでした。実際に「薬を飲むだけでなく、食生活の見直しや運動習慣も大切だよ」と伝える健康教育を行う機会もありました。そこで何より感じたのが健康予防に対する意識の低さです。予防接種を受けていない人が多かったり、感染症対策が不十分なのは、単に物資が足りないだけでなく、そもそも予防の大切さがあまり知られていないことも大きな原因の一つだと感じました。途上国支援を行うにあたって、病気を「治す」だけでなく「防ぐ」ための教育や啓発活動も必要だと感じました。

### 今回の経験を今後の学修及びキャリアパスの中でどのように活かしていくか

今回の渡航を通して、日本では当たり前だと思っていた医療環境が、実はとても恵まれていることに改めて実感しました。国民皆保険制度があり、誰もがすぐに医療にアクセスできる環境は、世界では決して当たり前ではありません。ケニアでは医療設備や制度が整っていない中でも、工夫しながら患者さんに寄り添い、地域に根ざしたケアを提供している姿を見て、単なる知識や技術の習得だけでなく、患者さんと向き合う姿勢や限られた資源の中での判断力を身につけたいと思いました。また将来的には国内外を問わず医療格差や医療アクセスの問題に向き合える医師になりたいという気持ちが強まりました。この経験をきっかけに、将来は国際医療の現場で貢献できるよう、まずは目の前の勉強や実習にしっかり取り組み、基盤を固めたいと思います。

### この事業での渡航を考えている学生へのアドバイス

アフリカでの生活は、日本での生活とは色々な点で大きく異なります。日本では当たり前にある清潔感のあるトイレや温かいシャワーなどはなく、治安が良くないので夜にダウンタウンで出歩くことは推奨されていません。それでも、そうした不便さを上回るくらい多くの学びと出会いがあるので、少しでも国際医療に興味がある方は、ぜひチャレンジしてみてください。知らない土地へ行くのは不安があるかもしれませんが、現地での経験は教科書や日本の医療現場では得られない価値観や視点、課題点の気づきを得ることができます。また、医療活動だけでなく、現地の文化や人々との交流もこの渡航の魅力の一つです。スワヒリ語や文化、子どもたちとのふれあいなどを通じて、広い視野をもつことができます。迷っている人がいれば、思い切ってチャレンジする価値は十分にあると思います。自分の視野を広げ、将来の進路を考えるうえでも、とても貴重な経験になるはずです。

### 計画全体にかかった費用(自己負担分も含めて、日本円で記載すること。)

渡航費(往復)	240,370円
海外旅行保険	7,235円
学費(教科書代や大学等プログラム授業料等)	330,500円
宿泊費	
光熱費	
食費	7,000円
その他	20,000円
合計	605,105円